



藝人譚

左東柳水編

初代 桐竹紋十郎の談話 (三)

出逢ましたどエライ奴は淨瑠璃語りですが其の名前を小式部内侍と掲げて入口には聖護院宮様の紋所に御用とした高張りを立てゝあります、此奴はものになると素知らぬ顔で這入りますと恰好し今始るといふ所でチョン／＼の拍子木と共に御簾を上ると十二一重に緋の袴といふ拵へで年頃は廿三四頭髪はお玉杓子の下髪といふんで實に抜る様な滅法好い女です、こつちは呆氣に取られて控へて居ると口上と云つても普通でない麻上下を付た勿體らしい奴が出て皆さんお頭をお下なさい、小式部内侍様でござるぞ、元來淨瑠璃といふものは小野お通の始めたものでデロレン祭文や、チョボクレと違ひ勸善懲惡を示すものだから今度宮様の思召により小式部内侍様が博くお前方に聞せるのだ、慎んで拜聴する様に、騒しくして

は無禮に當りますぞといふんで、大變なこと、丁度見物は木戸錢を拂つて叱られに來た様なものですな、デ彈語ですが中能く語ります、併し私は初めから喰はせものと思ひましたから木戸の所へ出て他國は知らず當國には嵯峨御所の出張りがあるのに何故無斷で興行したと私が初め喰はされた通りに遣りまして御用といふ提燈を取外し追て沙汰致すと云置て立歸りますと明日大夫元が遣つて來ました、段々訊すと是でも聖護院宮様の書付見た様なものを持て居ました、昔は金さへ上れば何様事も出來たもので、到頭少々の谷料を出させて吞合しましたが、酔ふた紛れに私の素性を聞いてア、お前さんも藝人か串戯ぢやない本物かと思つたてんで大笑になり夫から此女と一座で興行した事もあります、爾斯する内に出雲崎から買に來ました、同所は九十九里と云つた様な漁場で人氣の荒つぱい所だと聞て居ましたが出掛て行て驚いたといふのは一番目が「繪本太閤記」の通しで十日目の夕顔棚を仕舞つてから二の切として「本朝廿四孝」を出すとお客にはこれが別の狂言と腑に落さないものと見えて何故光秀が出ないんだといふ故障が出て來ました、じたい太閤記は一日長く見せられたもので名前なども腹に入てある處へもつて來て廿四孝の人形の勝頼が十次郎、八重垣姫が初菊、濡衣が操に似合て居るし衣裳なども出舍廻りですから自然同じ様なものを用ゐたものだから芝居を十年に一度位見る客には尤も有相な噺でサア光

秀を何故出さぬ彼は勇しくて良いのにといふ注文です、是は狂言が遠いのです論より證據淨瑠璃本を御覽なさいと云たが字を読む様な馬鹿は此村に寺の和尚ばかりだと云てきゝません、何ほお客様のことでも廿四孝に光秀は出されないと云ふと。彼の威勢の好い大將を出されぬといふ様な奴は擲れイヤ面倒だから疊んで仕舞と云ふんぞ亂暴にも私始め樂屋の背を殘らず擲ぎ出して海の中にボチャ／＼投込で仕舞ました、幸ひ遠淺でありましたからヅプ濡の儘道上がり生命だけは取止たが、したゝかに鹽水を呑み苦しくなりません、シタガ人形や衣裳を破損されては大變だと考へましてから、苦しいのを忍んで駆付ますと是から小屋を叩き潰さうといふ所でしたまア／＼待て下さい貴君方の云狀は屹度立ますからといろ／＼宥めまして、着替といふもありませんから上下姿も何も濡れ鼠になつた儘で廿四孝の中へ斯る所へ武智光秀と好加減の淨瑠璃を語らせ上手の方から光秀を出しました、實に馬鹿けた事があつたものぢやありませんか、スルト今度は何所から聞嚙つたものか一の谷の組打を出せといふ注文が出ました、怖いものですからハイ／＼と云たものゝ馬がありませんのでいろ／＼工風をした末蛇籠に用ゐる籠を逆にして風呂敷を冠せ反山紙を丸めて首を拵へ是を馬にして何やらお茶を濁しました、けれども段々嘶を聞くと此の前にも關三十郎先年死んだ關三の先代ですな、白猿と二人が同所で芝居をした時保名

の物狂を出した所芝居の中に踊を出しやアがつたと云て叱られ彌次喜多を見せましたに仁和加を出して人を馬鹿にすると云て是も散々に擲られた末海に叩き込れたと聞きましたから怖くて遣られませんが、ソコ／＼に其所を打上げ尚方々を廻り廻つて上州の高崎へ行きますと恰好其頃東京の米澤町に結城座といふ人形芝居が出来まして迎に來ましたから茲が腕を磨く所だらうと考へて同座に出ました、其頃は人形芝居が衰へたと云ても未だ名人がゐましたよ、薩摩座の陸奥大椽老人でしたが古今の上手其人の息子で三代目西川伊三郎是が女形の名入又辰松六三是が三枚目の名人で前にお嘶まうした通り芝翫さんの振付師でした此の三人に就まして彼是十年間修行をしました、今の入形遣と違ひまして甘いことを教てくれますよ、何しろ其頃でも俳優は河原もので卑められたが我々は一般の取扱が違ひまして帶刀さへ許された位ですから腹が第一違ひます又其時代は妙ですなア、いろ／＼の藝の内に分業法ともいふべきがありまして吉田萬造といふ人は足を遣ふが實に名人でした、又太田鱗造といふ人は左の手の名人で首はカラ遣ひません夫れでも有名な阪三津、歌右衛門、半四郎などといふ俳優の振付は皆此人でした、嘶はチョイと外れますが今の芝居でも能く其形を遣る人がありますよ彼の手習鑑の首實驗で松王の二度の出に「梅は飛び櫻はかるゝ世の中に何とて松はつれなかるらん女房悦べ俤はお役に立たぞと、すつと

通るは松王丸」とチヨボに連て這入る所を源藏が斬付る形を遣りますね、彼れは誰君も御存じの本文に「見るに夫婦は二度悔り夢か現か夫婦かと果れて詞もなかりしが武部源藏威儀を正し一禮は先づ跡の事は迄敵と思ひし松王、打て變りし所存は如何に」とあれば先づ呆れるが趣旨で斬付るといふ法はありません。又其様形はなかつたです、是れは其頃猿蓑町で歌右衛門が源藏、阪三津が松王をした事がありました。双方とも敗す劣らずの大立物でしたが、此の役柄は松王が主人公で源藏が何しても一枚譲らねばなりません、一禮は先づ跡の事といふ言葉がありますから、シタガ此又歌右衛門といふ優は中々剛情な役者で役の上ではありますが其の下手になるのがむかつてかなひません、我々でも能く舞臺でさういふ事がありますよ、デ何したら好からうと振付師の太田鱗造に相談をすると夫は是迄敵と思ひし松王といふ台詞があるから門口で斬付けなさいと云て教へました。是は面白いと其通に遣て溜飲を下たといふ斬があります、是が今に残つて居るので太田鱗造の機轉はいふまでもありませんが其位重きを置れた振付師は我々人形遣から出たものです、夫から少し廻りますか享保年中に小山小三郎といふ後に藤井と姓を改めましたが是は人形の傾城を遣ふのが古今の名人でした、實に何見てもしとやかな中に俠な所があつて傾城其儘ですから小山が甘い／＼と評判になつてツイ傾城の事をおやまと今でも云ひ傳へる事になりました、此様名人が出たから自然世の中から普通

の役者よりも一枚上に見られたのでせうが、今の有様は何です情ない譯でありませんか、ハア人形芝居と只の芝居とに就ての意見ですか夫は餘程違ひますよ、芝居の方は既に右團治さんのお断も出て居ますし、又其道の方々が段々お断をするのですから夫は其方へ譲るとして、私は本業の人形だけに就てお断をしませう、自體人形芝居は人形をいきた人開らしく見せるのが本意であらうと私は考へます、人に依りますと人形が指差をする時などに五本の指を揃へて手首を同時にグイ／＼と指差したり、或は物いふ時に首と手足をガタ／＼動かしなどする人もありますが彼れは畢竟人形の不自山な事を示す様なもので結局人形を見せるのですから私は取りません、矢張り指差をするなら人間らしく人差指でチヨイトナア＝彼れは人形が泣く眞似をして居るのだと御客様に思はれては泣いてくださる方がありません、今では大夫が出語をする人形遣が上下姿で遣ると云ふ事になつて仕舞しまたが彼れは何もいけなひと思ひますな、御客様が何しても大夫を見たり人形遣を見る氣になりました人形に情が映りません、デスカラ大夫は御簾の内語り、人形遣は黒ン坊で遣るのが宜らうと思ひます、人形が口を開ば人形遣も口を開け、首を振れば首を振る是は自然遣つて居ると、爾いふ傾になるものですけれども人形芝居道の法格として厳しく禁じてある位ですから、然し此節では最う大夫は出語をするもの人形遣は立派にして出るものとなつたのですから容易に行はれますまいが成らう事なら爾した方が宜からうと思ひます。(未完)